

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2025. 9



令和7年9月1日発行(毎月1回1日発行)第73巻第9号

No.808

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持でここがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

二〇二五年 九月号 (通巻八〇八号)

◇今月の二十首詠……梅 雨

石塚貴美恵 2

■作品

菊地栄子・河野繁子他 4

A 片倉ひろみ他 18

B 金子美智子他 40

C 神林和江他 50

A ふじとよひこ他 64

■オリーブ集 島根美智子・鈴木剛之他 32

◇今月の二人 小南由子・松村容子 14

私と短歌との出会い (277) 有馬さと子 17

■〈第一歌集を讀む〉 30 28

大原真理歌集『シャガールの旋律』

―無色の空に愛を放つ― 小林さゆみ

◇色のアンソロジー 〈赤〉 山本 孟 30

■遊覧寄港〈曾祖父の従軍日誌とドラマ「坂の上の雲」〉

菅野輝子 38

小野茂樹の言葉を拾う (2)

■歌壇月旦

会話体 桧垣美保子

39

■七月号作品批評

A……藤田美智子・本元由美子

56

福光敏子・鈴木文子

B……中山真弓・藤田しん子

C……磯田ひさ子

オリーブ集……柴田登志恵

54

十首選

大久保麗子・和田健二

54

今月の二人・作品評

久我田鶴子

16

最近の歌誌より

〔編集部〕

55

校正室より

73

クリップ……76

神田通信……表3

(表紙デザイン) Tazuko Kuga

梅 雨

石塚貴美恵

しらぬ間に雨の季節は近づいて空気の匂いの変わる夕方
耕した花壇にトマト植えられず天気予報は梅雨入り告げる
星ひとつ見えぬ夜空の向こうから蛙の声のかすかに響く
植えられた田んぼの苗は整然と緑の風の流れるところ
農薬の散布をされた休耕地母の思いも消えてなくなる
薬剤で生き絶え絶えの畑には太い蛇佇んでいる
畔にまで薬はおよぶ紫の菖蒲色褪せはかなげに咲く
ジャガイモの芽かきの時期は今頃か咲き出している花の紫

昭和三十七年生まれ
平成十八年「地中海」入社
地グループ所属

父さんが植えた桔梗と母の声周りの草をそっと刈り取る

水無月に咲く南天の白い花風にゆられてかすかに告げる

裏山の淡竹はしだいに枯れてゆく百二十年に一度の開花

雨降れば次次伸びる筍のトンがり頭を今年は見ない

栗と竹の落ち葉を掃けば寺柿の花もついでに転がってくる

枯れはてた古木の周りに芽を出した山椒にもある小さな棘は

誰も居ぬ実家でひとり過ごす夜秒針だけが大きく響く

丑三つ時天井裏を走る音布団をかぶり唱える猫と

明け方にリズムを刻む杖の音は夢だったのか消えてなくなる

井戸覆う竹の蓋にはおまじない炭をくくってぶら下げである

井戸の蓋あけてのぞいて見る水面暗闇でもない鏡でもない

あるじなし色とりどりに嬉嬉として庭いっぱい
の皐月ほころぶ

作品 A

菊地 栄子

八重葎

・海

夢二式椿と思うピンク色ふくよかなるを振り返りつつ
寒風を防ぎしカナメの生垣なり息を凝らしぬ刈りゆかんとて
崖つぶちのあんなところに群れている黄の水仙は見事にまぶし
タネツケバナ・ハコベ・カタバミ家にわのわの衝動引き抜かんとす
引き抜かれちぎれ来る草根こそぎに抜けきたる草それぞれによし
八重葎・鳥野豌豆・姫女宛姫の名指すかたわらの草
新聞の歌壇に登場なせし人相聞歌詠みその後を見ざり

河野 繁子

夏椿

・雁

木のめぐり白き落ち花もありあげて一日花は惜しげもあらず
梅雨あけの早きを花に告げながらひとりとなりし淋しさも告ぐ
四十年前わが庭に來し夏椿別れの時の近しと話す
彼の世にも持ちてゆきたし夏椿、大山れんげ、石楠花二本
わが寿命神にゆだねて癒される花には興味なきらし娘ら
トランプを選ぶアメリカ以前には矜持のありし大國アメリカ
みていない所で凍土は溶けつつけ五十年後百年後の地球は

近 藤 栄 昭

ドイツの自由

・虹

朝靄の奥からレモンのほりくる夕までレモン天空回り
行き着くはある種の底流海を見る親しい海辺そこが生まれ家
フラシ天つま先食い込むカーベット異世界生まれる指間の感覚
木の根方りんごが落ちて沈黙が落ちたその後静かになった
扁平の両切りたばこゲルベゾルテ潰れた形がドイツの自由
透かし視る生垣薄く誘いて目の良い人に奥を見せいる
入り口にバンドエイドを伸ばすがに大提灯が山湯に下がる

近 藤 芳 仙

吉野五月(一)

・信

山の径二十五分の西行庵 訪ねゆけない峠きてゐる
熾のごと未だくすぶるものをもち修験道とふを黙して歩む
ゆたかなる杉林と御社同化して石段にあり 修験者の顚つ
金峯神社拝殿奥の石段を昇る金山毘古命見ゆその背に祈る
西行法師も松尾芭蕉も辿る吉野山 未だに細き道なり険し
役行者拓きしといふ修験道はるか熊野へ辿りゆく道
予期もせず西行法師像に遇ふうれし吉野水分神社入口

神田 鈴子

初曾孫

・大

みどり児を孫より渡されわが胸に命を抱くこの手に抱く
見ゆるがに黒きひとみの輝くを見守る家族に笑みのこぼるる
米寿越え曾孫を抱くしあはせをこころに刻む水無月の夜
この曾孫の生くるあしたは戦なき世なれとひたすら祈るのみなる
紫陽花の花毬あふれ雨を呼ぶ姑の忌日の近づく夕べ

季来ればのうぜんかつらの咲き満ちてオレンジ色が夏を彩る
冴えさえと胸透くばかりの背もみち久々に訪ふ石山寺に

上林 節江

あこがれ

・湾

タクラマカン砂漠のなかをはろと列車が走る夢をかきたて
シルクロードを旅してみたと云うわれに「ダメダメムリ」と子らの合唱
ひととせを着るとう習いサマルカンドに背き宝石のような喪の服
客人を父とも思ひもてなすとメロンをふるまう柔和なる笑み
十メートル掘りて坎児井の水をひき栽培というブドウうつくし
三十一、六十九、七十一へと寿命伸びるオアシスの民
星空に「月の沙漠」を口ずさむ少女のときも老いたる今も

坂上 直美

映画「国宝」

・天

真剣に悩みておりぬ流星と吉沢亮といずれ顔よき

幾度も見ておりしかど幼くて「曾根崎心中」美しとのみ

真直に「集大成と思います」吉沢亮のきらめく瞳

泣きながら演じただろう流星の天満屋お初剥けたお白粉

いい歌を作りたいけど悪魔とは取り引きしない取り引きできない

努力せず才能もないわたくしがなぜだか歌を作り続けて

明日もまたおそらく歌を作るだろう身に染みこんだ習慣として

坂出 裕子

くちなし

・洛

くちなしの花うつくしく白く咲く植ゑたる記憶あらぬ垣根に
種子はこびくれしか鳥が我が庭の垣根に白く美しき花咲く
梅雨の季を白あざやかに咲く花の美しきに萎えしこころ癒やされ
公園の木洩れ日の道なつかしき思ひ出いだき歩むここに
とほき日の美しき思ひ出つらなれるごとくに見ゆる遠き山脈
川べりの散歩の道に眺めみる遠山脈に光るさみどり
初夏の山辺に見ゆる新緑に明日を生きなむ力いだく

佐藤 道子

朝の道

・甲

「ベンチャン」とふ小さき老犬連れし女「この犬なれば生きられぬかと」
犬連れの人々と会ふ朝の道淋しき人の多きこの町
寄る犬の頭撫でればいとしげに「よかつたねえ」と飼主さんは
ラリちゃん与会ふのが習ひの朝の道大きな瞳のヨークシャテリア
ラリちゃんは息子が特に好きらしく小さな足で駆け寄りて
「散歩時間変りました」と飼主さんわさわさ道に待ちゐて告げる
ラリちゃんに頼まれ来しかと息子が言ひぬ「会へなくなつて淋しい」と

篠原 まり子

ゆく春に

・辛

散る桜川に流れて花筏沿いて歩みぬ月一通院

食べて寝てころばぬ事と医師は言つたそれだけさびしさは何

父ははのよい越えたる日々なれば小鳥一羽といのち寄せ合う

母の日の薔薇の鉢植え花盛り散りてもピンク薔薇は薔薇の美

大津への思いを馳せる歌会の師の声太くもがり笛聴く

不可思議な物語続き肩の鳥ねいまき鳥でなくてよかった

ふんわりと小鳥の羽毛抜け落ちて春のおわりの部屋の片隅

柴田登志恵 萩

・天

かなしみがあふるるやうに煙吐く大地ならむや浅間の山は
よわよわと浅間の煙吐く見つひと目なごりの雪を踏みしむ
やはらかな飛行機雲のうかぶ空うすら蒼色よきことあらむ
かもしかはわれを見てをりわれもまた目離せずにある浅間の山路
落葉松の林わづかに芽ぐみそめ蒼空すかし宙へ近づく
蒼空へただのにびゆく落葉松のちひさき芽吹きちひさきあくがれ
ひらきそむ沢のかたへの水芭蕉四日見をりしがほとんど変はらぬ

鈴木結志 手鑑

・福

空海の「風信帖」の草書体手鑑として心眼みがく
伝統の「高野切」書の流麗な美文字にひかれ素直に学ぶ
生きすなわち筆にこだわる美意識をおのれのもと古筆に学ぶ
一芸に一途ふでとり来し生きの現役続行はや白寿ぞよ
食うことがまず何よりも力づけ知恵づけとなる健康法なり
十二年籠山行に徹したる最澄の不滅の燈の初火を偲ぶ
美の定理花よりうたに移ろえど一杯の酒に語を死なしむな

関根榮子 半化粧

・埼

一時間ほどの外出もバッグにはとりあえず水のボトルを入れる
梅雨入りもたちまち猛暑の日々にしてテレビは連日熱中症注意す
夕ぐれの道の辺に浮かぶ白き花はやも咲き出す夕顔なりし
いつの間に駐車場となりし角地にてここにありたる店もおほろに
梅雨明けを待たずに三枚ほど葉の白く変りておりし半夏生なる
季くれば三枚ほどの葉の白く半化粧とう別名相応う
不自由な手もて夫は自らの為の手摺を庭に作れり

関根和美

リジョイス

・埼

帰りきて地図に辿れば義仲寺とおの派とはほど近かりき
見逃ししいまにかぞえていかにせん近江坂本訪う日のありや
朝もやにぼうとつかめぬ方角の湖にまること抱かるるもよし
語りたきひとと十分かたり得ぬままに宴の果てて儚し
ああこわれゆくあなたとあなた雨の日は特に辛い鬱だと言いて
死者生者ともに相寄る七回忌つきなど胸におさめ言わざり
暗き顔やめて見あげん天の背 リジョイスリジョイス今日がはじまる

高尾恭子

記憶せよ

・大

地すべりに消えた十四軒を埋めつくす百合野町なだりの花の絨毯
猪よけの柵に守られ町民に目守られ鎮もる花の絨毯
錆びついた鎌をひたすら研ぐ人の背さびしき季の日だまり
三十年を帰らぬ子らの色あせた真鯉緋鯉は空に雄々しき
山肌の西にかがやく真つ白な屋並み新たな生活あるらし
磯ヒヨドリの声はソプラノ小さき子の声にあわせる五月の下校
はつ夏の森のみどりの風になれノッポの父はおさなを背負う

高津砂千子

馬鈴薯

・平

潮風の吹きくる朝の道をゆくころよきかな胸を張りつつ
歩を止めて吾を待ちくるる息子の目おだやかなりき声も出さずて
歩幅広き息子に従きてゆく道のどこまで続く潮匂いくる
掘りあげて土のついた馬鈴薯をいただき戻る梅雨明けし日に
掘りあげし馬鈴薯もらい丸くことを茹でていただくほくほくと
酷暑とう言葉に馴れし夕つかた歌会のため出かけてゆくも
いただきし菊の花茶を味わいぬほんのり香るひと日の終わり

滝田靖子

うたた寝

・新

うたた寝の冷たい胸をなでていくいたはるやうに初夏の風はシリーズの十冊すべて読み終へてとりあへずまた一冊めを読む可愛いと買ひ来し人形今にして劉備張飛関羽と気付き駐車場は満車となりて満車といふ表示の前に車列伸びゆく待合室のベンチに肝の男ゐて午前十時の市役所ざわざわ順番の巡つてわたしの担当は若い女性の職員となる女かとひつそりため息ついてゐる自分にかくも幻滅してゐる

田土成彦

野崎詣り

・宙

慈眼寺に続く坂道上り詰めてそれからの石段見上ぐ補陀落はかなり遠方石段を見上げてまづは休憩とする壁面を過ぐる飛燕の影すぎて観音詣りの石段なかば二百段登りてすわりこむベンチ補陀落浄土の風を聞きつつ本堂の扉開きゐて説経する女庵主の声はあかるし御朱印は三百円から五百円に寺も経理のうへに成り立つほととぎす一声啼いてそれのみの山の冷氣に洗はれて行く

田土才恵

陀羅尼助

・宙

飼犬も猫も居らねば二人して出かける今朝のさわさわとありどつかりと河内晩柑テールに一步進めと言いたげに在りせとうちの太陽いっばい浴びしみかん君が魂宿りておらん振り向けば紀三井寺は緋の色に傾ける日の中に耀うイヤリング片方のみを揺らしつつひとつの思い秘め暮れてゆく終刊の結社誌届くその軽さ一冊に飽もる思いは深し陀羅尼助どこかやさしい響きもて熱暑の夜を十粒のみこむ

玉井綾子

夏至

・羊

地下鉄が夕焼け受けて橋渡る母を訪ねる週末は夏至施設にて暮らす人らが「夏至です」のニュースの声に顔見合わせる夏至の意味分かつてるよと言う吾子を見守っていく雨戸閉めずに北半球なればスイスも今日は夏至 十九時の空を友にメールす陽には陽の夜には夜の癒しあり吾が起きれば息子は寝入る母のいる施設を訪う日曜日朝日歌壇に母歌多し地下鉄が地上に出れば夕間暮れサイダー味の飴かみ砕く

中島央子

墨田の花火

・森

計画も予定もあらず日々の空白埋める大相撲中継夜半の雨降りみ降らずみ学友の便りも途絶え五月過ぎゆく呆けるのが怖いと娘は新聞のクロスワードに必ず挑むパソコンもスマホも不得手時代に遅れきりとて試さむ気力もあらず「寛容」の花言葉もつ紫陽花の真白き一輪花をつけたり庭先を埋めて咲ける紫陽花は娘が丹精の「墨田の花火」公孫樹の葉色増し来たる並木道見上げつつ行く日課の散歩

永田進一

野崎観音

・山

僧叩く木魚にあわせ声響く野崎観音蟬しぐれのなか本堂の梁に吊るさる狗張子説経の声と風に揺れおり大丈夫励まし昇る階段の手摺りの温みいつしか馴染む階段の手摺りの温み覚えつつ登り着きたる本堂の前慈眼寺にお染久松の墓ありぬ誰が供えしか花束ありぬ清々し堂の前なる紫陽花の佇まいにも気品の香るマンホールの蓋にも描かるる野崎参り浄瑠璃歌舞伎に恋の炎残す

永塚節子

蕎麦

・銀

夏の空は私のものと伸びゆるのうぜんかずらの朱の色美しき箱根そばの名にほだされて求めたる蕎麦の産地は小田原なりしそばつゆの碗は会津塗り遠き日に父自らが求めたるものDNAしかと受け継ぎそば好きになりたるわれをうつしえ笑う墓の辺は緑ひと色そよ風におのれを預けしばし無となる北富士の野面を渡る風にゆれ咲きているらんゆうすげの花夕べに開き朝に閉するゆうすげを愛でにし友の逝きて久しき

仲西正子

友

・沖

ふところに十八の日の春の風よびつつ友と彦根城ゆく名古屋駅の別れの朝に渡しくれし便箋十枚の友の文あせず会えばすぐ弾む心よ明日のこと語れる友の足腰からし足腰を鍛えし友はいくたびもふりむき我を待ちてくれしよ書の道を極めゆく友のひたすら十八の日も煌めいていた眼三年後の傘寿の日にはと予約して彦根駅に友と別るわが歌集「まほら浦添」表題は友の筆書きしみじみと見る

中村博子

大阪万博

・瀬

孫勤務の会社関わる西工区大屋根リングを覗くと申し込むくらぐらとしつとも水無月二日には女性会から万博パスツアー泉大津ワシントンホテルにリッチなる和食ランチを済ませ夢洲へ見上げた大屋根リングの高さかな行き交う人ら小さく見ゆる木造の日本技術のこの匠クキ使わずに世界最大大屋根へエスカレーターに上りゆくリング一周二キロは叶わぬ回廊へ上がればラッキー西工区孫想いつつ友と巡りぬ

西堤啓子

平和

・天

アメリカ楓熱をはねのけ光あり繁れば空を区切って青い半夏生白くなり初め六月の猛暑の記録更新される木綿・麻 扇風機に揺れ染まりゆく夏のさらさら快適指数会いたいひとあれば顔上げ湖の風に向かって光のなかを天気図に勢力圏はせめぎあい太陽系第三惑星争い絶えぬ手放してはならないものを確かめる今「かわいい」があふれる平和溺れる者に見返りなければ助けぬと言うのが流行り 渦巻き銀河

浜谷久子

握手

・地

二人だけの小学校の同窓会ふるさと空白埋める約束病得る友の回復もう少し待ってあなたの町あの店で小学校同級生の故郷からの手紙が文箱を四十年ぶりに役目ひとつ終える心地に去るホール集う人らの始まりを祝しひと息ついてゆっくり歩む帰路いつもの仲間の声につつまれ万感のこもる集いの散会は明るく笑顔の交換をする約束をすることのない再会の願いを交わす固い握手に

檜垣美保子

鈴

・昂

さざんかの垣根のみどりの覗き窓かきりなく小さくなりて六月花の季のおわりし薔薇とつじの木つなぎてひかるくもの糸みゆおわりたる花と詠みつつ終わるとは何と問いつつ花のむらさきつゆ入りを知りたる午後は小鯛のざるに盛られてかがやくを買う年魚と書く鮎の塩焼き尾を反らせ売られてこれも寿命というやもういちど行きたかったね品の滝 母の齢を越えて生きれば草笛もしろつめ草の冠も笹舟もみな母につながる

福田庸子

水の春

・今

蕎麦畑が田と代はりたる水の春例幣使街道の樹樹映しゆく
米不足あふれかへりし報道に水あたらしく今年の田圃
新しく水張られたる田の面にのぞく早苗よ今年を祈る
丁寧に洗ひ束ぬるを称へたき野菜農家の手間に輝く
小賀玉の花の香りのただよへる五月の畑に土均しつ
余韻なく猛猛しき声画眉鳥に惑はされゆくこの夏もまた
咳一つなき三時間全身の筋肉緊まりし映画「国宝」

藤田美智子

年譜

・新

洗ひても花粉の痕の消えざりし小さき悲しみなれど忘れず
語りかけし母の返事のやうに聞く朝ごとに違ふ鈴の響きを
《玉澤》のクリームあんみつを食べにゆく母を恋しく思ふ夏の日
夜にまた思ひ出しをり聞き流してゐたはずの長き自慢話を
光太郎智恵子の泊まりし不動湯のひと部屋に君と夜を迎へき
われの齢の頃はいかにと馬場あき子の七十二歳の年譜読みる
悔いを語れば死を待つ心の揺らげるを知りぬし君か語らずに逝く

藤森 巳行

歌を詠む

・銀

冬ソナを見て思ふこと春ワルツ夏シンフォニー秋はエレジー
九時に起き昼飯作りテレビ見る晩酌五勺で今日の生過ぐ
テレビ見て居眠りをする悪い癖ミステリードラマの犯人分からず
湧き上がる思ひのままに歌を詠む私の歌はそれでいいのだ
民衆の大地に根を張る歌を詠む無名の誇り我が胸にあり
歌に出会ひ歌詠み続け消えてゆくそんな人生あつてもいいか
キューボラのある町に住み六十二年我が家の小百合も傘寿を越えたり

本元由美子

FLEE (逃亡)

・岡

辛すぎる打ち明けられない辛すぎる秘密を抱へるFLEE (逃亡) の日々
昨日は百合今日は振花とわが夫はSNSに吾の花をUPする
梅雨じめりわが裏庭の紫陽花は健気に返す深き藍色
梅雨晴れに時を違はず鳴く声の「特許許可局」のどかに響く
ばあちゃんの裏庭に鳴く鳥は「スキッススキ」孫に便りをあげる
純粋は穢れや汚れよせつけず総ての細胞は透明となる
透明になりて生きる生命のミッションは何 謎解きしよう

牧 雄彦

テリトリ

・大

庭隅のじふやくの花生き生きと咲きそろひたり梅雨に入りて
テリトリ守りて今年もじふやくの一重と八重がそれぞれに咲く
嫌ふ人多しといへど庭隅のじふやく今年も咲けりかはゆし
星々と呼応し続くや夜を白く咲きそろひたる庭のじふやく
じふやくの清楚な花が好きといふ人ありはるかにとほき梅雨の日
枇杷の実のややに黄色を帯びたるが洩れ差す朝日に輝きて見ゆ
枇杷の葉の古きは落ちて若き葉がみどりに光る実を囲みたり

松本多摩子

老いの坂

・桜

老いの坂未知の世界に歩を進めまだまだ見たしこの世の景色
生あらば人は老いゆく定めなり若くに逝きし亡夫思う今
二十万博入場者達成と娘の助けありわれも一人に
娘や孫に見守られている人混みに振り返る目のああ温かし
急激な暑さ体調を狂わせて日々のニュースは熱中症の数
梅雨晴れの短いときを駆けまわるあじさい満開となりの園庭
さめうらのダム百米の上に立つ四国の水がめ一〇〇%の日々

三 浦 好 博

屏風ヶ浦

・銃

六月の屏風ヶ浦の霧を巻き霧に巻かるる風車の群は
銃口を四方に向けて構へる鉄砲百合よここは平和ぞ
風のなき屏風ヶ浦に浮かぶ帆の白は還らぬ我の青春
砂浜を一步一步と歩きぬて狭窄症が治る気がする

把握できぬ程の死者数民族が絶滅さるるをお茶飲み見てる
モアイ像に似て来て我の老い深み屏風ヶ浦に海を見てる
六、八、九、三者合作愛されて「上を向いて歩こう」は還暦を過ぐ

三 木 ま り

小 徑

・昂

出かけない理由を探さなくていい紫陽花の花ひかる朝は
眼に浮かぶもの零さずに歩きたい飛行機雲は西へ向かう
少しずつ明るくなりゆく空の果て梅雨あけ前の風が生まれる
わかり合えぬ人の言葉は昏く遠く風の海の霧笛のように
果てのない言葉の海を迷いゆく權を無くした小舟が揺れる
隠泊に飛び込む蜃の足太く水音重くひと日暮れゆく
銀の羽根ひかりを集め北へ飛ぶ飛行機雲は解けて消える

宮 本 靖 彦

炎天つつき

・凌

梅雨月も炎天つつき下旬入りとか減り雨タンク底の音響く
ドラセナも水欲しと窓に騒ぐ午後故郷は日一度スコール降るとぞ
朝抜けば夕には生うる草を引き空梅雨の陽に背中を燃やす
パソコンの表紙に見せるカルガモの茶の羽根彩る配色美麗
例年比トマトは赤く実りすぎ近所分配美味と賞めらる
若き日は練習場への通ひ道今は医者よりすすめの散歩
畑つづり建てし道端幼稚園駐輪すくなく時代を映す

三 好 聖 三

つ の

・伊

しわくちやのペーコンエッグを食べたならゆらゆらゆら喫煙のまんなか
コンテナ船はハンブルグまで行くらしいエルベの風をしなやかに分け
アフリカの角から望むアデン湾猫は曇れる眼鏡を拭きつ
自転車はフランクフルトを抜けてゆくベンヤミンの髭面を乗せ
音楽の講義を聞きにゆくらしいアドルフはもう居ない大学
娘らにセシルカットを薦めればたちまち嫌だと返してきたり
奴はさあ「嘘つきだって」との噂そりやあそうだよ歌読みだもの

御代田 澄江

古 古 古 米

・茨

月を目前に減速成らぬロケットの月面衝突無念なるべし
なさけなや人に引き下ろさるるまで大臣辞めぬ蛭の如きか
古 古 古 米 申し込まれよと新大臣吾は麵類にてつなぎとなさむ
がうがうと風吼雨も激しかり終日寒しメイ・ストームぞ
ビル・ゲイツ氏は途上国支援に全財産二千億ドル寄付さるとふ
ゲイツ氏の人類救援時代を生くる吾はも仰ぎ見るかな
米国のもう一方に関税と人種差別の権力者なり

もとむらしげと

生 徒

・そ

一日目名を確かめてゆく授業例えは「草子」という子の名前
愛されて命名されし名を持つる子らを慈しみその名を呼べり
漱石を読みし生徒と稀に遇う出逢いがしらの事故のごとくに
人を殺したことがあるかという生徒ときどき現るこれぞ僥倖
「罪と罰」読み始めましたという生徒ときどき現るこれぞ僥倖
司馬遷の恥辱の生にふれゆけばうつ伏せし子が顔をあげたり
好きな作家いるのと問えばたちまちに饒舌となる国語の係

桃原佳子

生くる

・沖

ひもすがら鴉鳴くなり胡瓜の苗倒れぬように竹の杭打つ
荒草の穂は下より花の咲き初む伸びたる芯は風に揺れおり
耕運機縦横に走り耕せる土の後追い驚の舞い降る
李二十個ジャムに煮つめて香り立つニュース不穏な梅雨明けの一日
なにもせず空ろな心でスマホ見る孫との暮らしに疲れている日々
振り返る日ばかり続くわが暮らし昭和平成令和を生き
雲もなく新しい朝がやって来た冷茶飲みつつ天空仰ぐ

山下雅子

防空頭巾

・習

八十年前の八月十五日ボツダム宣言受託された
ボツダム宣言受託の御声に「戦敗けた」悲痛なる声われを貫く
今夜から電燈つけてよいのかと十五歳のわれのひとこと
たかだかと防空頭巾を放りたり敗戦の空深々と澄む
蒼天をのびやかに舞う防空頭巾われは戦時と決別したり
赤紙に征きし父よいさなる夾竹桃の紅ゆれて
今夜から空襲はないされどこの防空頭巾われは離せず

山野幸司

中学生

・沖

早々と登まれて置かる制服の明日立ち上がる入学式に
君はもう卒業したる家の中登校拒否の看板下ろす
理屈など言わずもがなの中学生今日も陽の中ペダル踏み込む
さらばバイ過去の自分を脱ぎ捨てし服はMよりLへと換わる
友達に囲まれ笑顔中学生もう戻るまい漢字三点
一日中ノートにペンを走らせる中学生は何に目覚めし
中学校何がそんなに楽しいか友の噂に大盛り上がる

山本 孟

荷風散人

・大

潤一郎荷風寂聴 軍嫌ひ人情詩情に深く分け入る
ラジオ嫌ひ荷風の声は聞かざりき直哉実篤訥と話す
埃立つ荷風の部屋に對談す美しき日本語にキーン驚く
仲見世の裏 洋食店アリソナに「酢す」とメモす誰も読めざり
飯炊ける間を仏蘭西語訳「四書」を読む荷風の字の豊かさ深さ
踊り子に「にふう」と呼ばれ浅草に歯抜けのにこに爺さん荷風
健脚の荷風背広に下駄鳴らしひかげの花と出遇ひ期待す

養学登志子

野崎観音

・凌

野崎参りおとき嶺のように聴き挿頭のきら木履の鈴や
あれは夏片肌ぬぎに鷹をあむコマ打ち返り婆のはなしは
桜井の正成つらき子別れや高野聖のうちまざりつつ
二百の磔手摺をたよりにのほりつつお染も聞きしか太鼓のひびき
濃き淡きあじさいの花めでながらかの遠き日の薬の感触
お染久松小さき塚に詣でけり木蔭にひそといとしき安の
鈴の尾をじゃらんと引きて手合わすも二十円也の線香手向けて

横田敏子

夏

・福

青々と伸びゆく早苗なびかせて吹くはつ夏の風になりたし
黄楊羽の初蝶ひらりと舞いきたりはつ夏の風にふわりと乗りて
戸を練れば朝の光の容赦なくキラリと眩し 無理せず行かん
いつもより眼がよく乾くたつぷりと目薬さして深呼吸して
この夏の暑さはそのまま受け止めん体力温存、病後のこの身
区切り良きページを伏せて立ち上がる水分補給の前にアイスを
「今晚の酒のつまみはサラダです」記念日に届く歌友のメール

磯田ひさ子

夜ノ森

・森

串線の駅の名前に浜がつき松の林の間に海見ゆ
山低く連なるみどりに開かれてひそと動かず「浪江」「夜ノ森」
放棄田の荒るることこそ無惨なれかつて際まで苗を植ゑにし
口鎖す民草の傷曝さるる敵討つこと放棄田荒れて
道路 家 施設いちやうに真新し大震災の後の復興
震災後生まれ変はりし集落が同じやうなる姿に凝る
高台の家並の先に太平洋雨降る昼を白く烟りぬ

市原やよひ

あじさい

・萬

あじさいを見んと訪いし神社には夏越の祓の茅の輪のしつらい
あじさいの花の少なさ嘆かえば茅の輪くぐりの誘いがありて
あじさいは総て白なり田の中の直くなる道を飾りて伸びる
田のみどり白に切り裂き伸び行ける先は臘のあじさいロード
帰る来てそれぞれが言う数多い燕の子生れし夕べはなやぐ
嬉しさを夫の遺影に告げている燕誕生スマホを見せて
渠の淵に止まりて見守る親燕人かまうなく堂堂として

梅本武義

一縷の期待

・羊

猪の侵入のなく春が行く孟宗葭に竹の子伸びて
家ありて菜園あれど初任給聞きつつ侘し年金暮し
苗床を離れ菜園に迎えられ梅雨の晴れ間に根を張る南瓜
骨見ゆるまでの癭瘡義母百二歳御迎え間近か痛みを言わず
痺いのも病の一つ眠られず蛙聞きつつ葉塗りおり
自覚なき病まであり驚くも齢を思い寿命を悟る
行うは難しを正に見せられるトランプにあり一縷の期待

大浪美雪

鳥の湖

・森

高速の「のぞみ」にすれば本曾川も鶴飼ひの川もうしろへうしろへ
富士川に向うに黒く聳え立ち山肌荒く迫りくる富士
琵琶湖線に乗り換へたればどこからか京の言葉のはなりとして
高層の窓より見下ろす鳥の湖輪をかく鳶の小さく見ゆる
大橋の向うの里にかすみたち王朝絵巻を広げたるやう
「離離航海」の話を聞きし耳に届く周遊船の「オールドマン・リバー」
ミシガン号の赤き外輪廻り出し水泡の勢ひ五大湖までも

奥田陽子

山吹

・羊

おもむろに静かに陰閉じきたりてその眼ふたたびひらく事無し
息を引くそのおだやかさ見届けぬ昨日の苦しみ嘘のごとくに
名を呼べる声の虚しく響きいてしばらくのちを医師の入り来る
温みいまだ残れる体に触れにつつ出でし病室振り返るなく
そこに居る それだけで善い人だったくり返して子に涙して言う
わが名呼ぶ声無き部屋にたたずめば卯月の光さやくボプラ樹
霊柩車ゆるゆる行けよ花吹雪き山吹の黄の燃え盛る道

久我田鶴子

叩き

・羊

はづかしめられたと心は呻くのかとめどなく言葉あふれさせつつ
そこにある核に気づいてしまふときひとの熱さがきふに遠のく
まもらむと熱くなるのは脆さゆゑあおのれに執しひとは苦しむ
案になる方法はある にしてもなほもがきてひとり見いだすまでを
なまとなまぶつかりあひてスパークスエネルギー消費生きたといふは
頭皮、マッサージされつつ声の出る 疲れの深部にとどく人の指
くほみかた尋常ならずでにして茫つらぬく野の闊懐